View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

中華文化の領分と日本文化の領分 ： ヨーロッパの観点から

著者	Vande Walle Willy
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	10
ページ	537-548
発行年	2017-03-31
その他のタイトル	Boundaries between Chinese and Japanese Cultures as Reflected in European Perceptions
URL	http://hdl.handle.net/10112/10942

東アジアの歴史と動態

中華文化の領分と日本文化の領分

——ヨーロッパの観点から

Boundaries between Chinese and Japanese Cultures as Reflected in European Perceptions

Willy VANDE WALLE*

Throughout history it seems that definitions of Japanese cultural identity were invariably shaped by a pre-existing self-definition of China and Asia (especially India and Central Asia), and after the Meiji Restoration by a pre-existing self-definition of "the West." Due to the distance of perception Europeans have tended to view the Far East (Tōyō) as one single lump. When they conceptualize the Far East, they officially include China, Japan and Korea, in that order, but often they actually mean China. When in the second half of the 19th century Japan seemed to be the more successful member of that threesome in transforming itself into a modern nation, the Western way of conceptualizing Japan within the wider Far Eastern culture changed accordingly, and put more emphasis on the originality of Japanese culture than on what it has in common with the others. This changing perception was also carried over in the orientation of the academic study of Tōyō in Europe. On the other hand, when we shift our vantage point to Japan, it is safe to say that until the nineteenth century Japan on account of its geographical isolation has had difficulty in constructing the "other." There were not enough "others" in its immediate vicinity, and therefore they had to be forcefully created and emphasized. In the early periods it was China and India. Especially the Buddhist worldview greatly helped in imagining the other. This lack of an imminent other led the Japanese to stress the derivative character of their culture. By doing so, they intensified the faint presence of the other and stressed, for internal consumption, the notion that Japan was part of a wider 'civilization.' Consequently, just as the uniquely Japanese culture is a construction, the image of indebtedness to continental civilization was also carefully and meticulously crafted and cultivated. This latter construction largely worked and works through the mechanism of translation, which is not simply a replicating or duplicating process. The translated object is divorced from its original and is transferred into a context that is different from its original one. Its meaning in the new context is often uncertain, vague, indeterminate or ambiguous. The "difference" between the original and the target context is usually played out on the level of connotation, sometimes even on that of denotation. The connotation implies a difference of value: a higher or lower value or prestige clings to the translated culture. Usually Chinese ranks higher, while Japanese ranks lower, although in some cases it is the reverse. In either case the distinction between Wa和and Kan漢is conceived in terms of hierarchy or circumscribed areas of applicability.

キーワード：文化論、欧州東洋学、翻訳文化、華夷秩序、アイデンティティ。

* Willy Vande Walle：ルーヴェン大学名誉教授，関西大学名誉博士，第25回山片蟠桃賞受賞者

Ⅰ．理論的考察

文化とは境界線を画すものである。自らの過去を作り上げることによって、国家や国民は境界線を引くのである。多くの国家、歴史を生き残ってきた国家のおそらく大部分は、当の国家が自分自身のものであると主張している文化圏にはもともと属していなかった地域をも含むような境界線を引いている。例えばタイは、明らかに異なる、伝統的にタイ王朝の領土に属していなかった地域を、自分の文化遺産に組み入れている。しかし、そのような国家が自己の文化史を語るとき、昔時と現在とを繋ぐ連続性はどう見ても疑わしいのに、このような地域の文化遺産をも勘定に組み入れるのである。同じことが中国にも当てはまる。中国は、所与の文化現象が生み出されたとき、中華帝国の領土に属しておらず、中国語を伝達手段の言語として用いていなかった多くの地域の遺産を回顧的に自分のものであると主張する。さらには、本国の勢力は近代の水準からすればそれほど及んでおらず、境界線もずっと拡散して曖昧であった時代に、「属ス」ということが何を意味していたのだろう。時間をさかのぼって、自己自身の文化の先祖とは異なり、しばしば敵対さえしていた政治的存在と明らかに結びついていた文化を、自分のものであると主張してもよいものだろうか。

Ⅱ．日本文化

イマニュエル・ウォーラステインは文化という概念に二つの異なる側面を区別した。一方でその用語は、個々の社会の中で、「『基盤』であるものに対する『超構造的』なもの」（Wallerstein 1990, p.32）の水平的分割を指示する。この意味で、文化は、技術や経済といった、社会におけるより物質的な要素から区別されなければならない。しかし、他方で文化はまた、日本文化を共有する集団、または中華文化、西洋文化、ドイツ文化を共有する集団というように、人類をそれぞれ異なった集団に分離する垂直的な分割を意味する。「文化」という概念は、古い由来を持ち、興味深い意味の展開をしてきた。その最も早い段階、15世紀と16世紀に遡れば、それは心的道徳的陶冶、作法の洗練、知的芸術的嗜好・創作の高い達成度に近い意味を持っていた。近代になって、文化という概念は新しい、より包括的な意味を与えられた。ある民族の（限定された発達段階という含みを持った）文明、ある個別の社会の風習と信仰という意味である。「陶冶、洗練」という意味を持ったとき、文化は人類を統合する概念であったが、「ある特定の」社会の、という内包を持つようになったとき、人々を区別する概念になった。第一次世界大戦まで、今われわれが文化と呼ぶものは、大抵「文明」と呼ばれていた。第一次大戦後初めて、われわれが現在「文化」に結びつける意味をドイツ語から取り入れ、殆どの西洋言語で通用するようになった。類似の内包をもつ二つの用語が併用されるようになった以上、それらが共に存在していること自体が、それらの使い分けをはっきりさせるのを促す傾向にある。このように、「文明」と「文化」という語は相互補完的な用語として一組のものとなった。

日本の場合は、第一の意味から第二の意味への移行を確認するのがむずかしくない。明治時代初期、「culture」は、現在われわれが期待するように「文化」としてではなく、「文明」（大抵「civilization」と翻訳される）と呼ばれていた。文明は西洋化の表れであった（ウォーラステインのいう第一の意味の内

包に相通ずるものがある）が、大正時代以降、その意味は第二の意味の方向へ次第に進み、徐々に日本の独特さを基調とした諸種日本文化論の基礎を生じた。では明治時代以前には「文化」のようなものは存在しなかったのであろうか？ 15世紀と16世紀のヨーロッパで用いられたような、初期の意味とほぼ一致する、第一の意味では、存在していた。日本でもまた、文化は陶冶・教養のことを意味していた。このことは一揃いの洗練された作法とふるまいの型、更に言うまでもないが知的たしなみと文明言語の駆使も含意していた。日本では、古典日本語（文語）の駆使、さらには古典中国語の翻案である漢文の駆使が前提となっていた。これら二言語の併用は一種のダイグロシア（二言語変種分用）であり、知的階層がギリシャ語とラテン語を使いこなせた古代ローマで多く見られたものと似ていなくもない。

歴史を通じて日本の文化的同一性の諸定義は常に、中国とアジア（特にインドと中央アジア）の自己定義の先在を前提としていたが、明治維新以降は、論理的、先進的、科学的、個人的、能力主義的という、「欧米」の自己定義の先在に依拠して形成されるようになった（姜・村井 1993）。それゆえ、「文化」という概念が平面的内包から垂直的内包へ移行したとき、その内容に相当な調整を行う必要が生じた。20世紀初頭に歴史学者が日本の上古史を再発見したとき、その再発見は大いに歓迎された。というのも、それによって日本人は、日本文化の起源を非中華的起源まで遡って辿り、その結果「日本」をより広い東洋（the Orient）からより明晰に区別できるようになったからである（Tanaka 1993, pp.153ff）。

ヨーロッパ人は従来極東というのを一つの塊と見なす傾向があったし、いまもなおそのような傾向が続いているかのように見受けられるが、これも距離の知覚が同じく働いている結果と見てよいだろう。ヨーロッパ人が極東を概念化するとき、建前としては中国、日本、韓国をまさにこの順番で含意しているが、大抵彼らが実際意味しているのは中国のことなのである。日本は1970年代と1980年代にその経済力によって国威を海外に伸張していき、注目を浴びたとき、その三つの国の中でもっとも象徴的、代表的な国として実際中国に取って代わったかのように見えた。ところが、近年、中国の驚くべき経済成長や、国際舞台での地位の上昇や、それを取り巻くメディアの宣伝文句やらで、中国は再びヨーロッパの極東表象において中心的な存在の場所を取り戻したように見える。

19世紀後半、アヘン戦争と明治維新の後に同様の展開が見られた。同時代のヨーロッパ人の理解では、日本は、その三つの国の中で、近代国家への変容に唯一に成功した国であるように見えたことに疑いの余地はない。その結果、ヨーロッパは日本の事物に対して鮮烈な関心を寄せていった。日本の事物は1867年のパリの博覧会や1873年のウィーンの博覧会のような万国博覧会で目玉になっていた。この趨勢は残りの19世紀の間中続いたし、万国博覧会の最盛期が続いていた間は20世紀にも持ち越された。

Ⅲ．歴史的視点からの極東の研究

新参者である韓国の研究ではそういうことはないが、日本と中国の研究の領域でも、同様に先行後行の順の交替が生じたことに、われわれは気づく。実際、フランスでは中国の研究の方が早かった。フランスにおいて、ジャン＝ピエール・アベル＝レミュザ（1788-1832）とスタニスラス・ジュリアン（1799-1873）は中国学の先駆者であり、最初の日本研究専門の教授が登場するより何十年か早かったが、彼らはある意味で、長年続くフランスと中国との接触の後継者であった（小野 2006）。フランスにおいて日

本研究の最初の教授はレオン・ドゥ・ロニーであった。彼は1868年東洋言語の専門学校の教授に任命された。彼は1873年に設立された「日本、中国、タタール、インドシナ研究会」と最初は名づけられた学会の創始者の一人だった。この学会の名称の中で「日本研究の会」という部分が学会誌の扉に肉太の活字書体で印刷されていた。1887年２月21日の定例会議で、この学会は名称の変更を決め、以来、「中国・日本・南洋学会」として知られるようになった。この名称の「中国・日本学会」という部分が学会誌第７号以降は扉には肉太書体で記された（tome septième 1888）。これは言語学者が類像語法、つまり現実に観察される関係をなんらかの方法で模倣した語法、と呼ぶ事例である。この学会誌の名称の変化は、極東を構成する国々のヒエラルキーにおける順位に関してヨーロッパ人の理解が徐々に変わりつつあったことを示しているように思われる。これは些細なことだと考えるかもしれないが、この些細なことが深層にある評価と理解の徴候なのである。

興味深いことにドゥ・ロニーは専ら日本研究をしていたわけではない。彼は他の東洋言語に加えて、中国語をスタニスラス・ジュリアンの下で勉学していたし、道徳経から山海経に至るまで、中国古典を主題にした著作も多く著した。一般的に言って、東洋学者を以って自任するする学者は、日本研究と中国研究を兼ねることが多かった。日本研究は中国研究の延長線にあるもの、あるいはその副産物と見られる傾向が強かった。これは先に述べた距離による見方と、更にヨーロッパの東洋研究者の先入観と大いに関係している。かれらは文献学者であり、研究の対象であったアジア社会の中でも特に知的エリートの文化に主に関心を寄せていたのである。

オランダでは最初の東洋学専門の教授はジョセフ・ホフマン（1805-1878）であった。彼は中国学者というよりも日本学が主であった。フォン・シーボルトが1828年にヨーロッパへ帰る旅の折、連れて帰ってきた助手であった、コ・ツィン・ツァンという名の中国人に日本語を学んだのであった。ホフマンは、二人の日本人、津田真道と西周の助けを得て、中国の古典『大学』に基づいた日本語の入門書を編纂した。この入門書は中国語（文言）のテキストの書き下し文とローマ字に表記したものを収載していた。彼の理解では、書き下し文が日本語を代表するに足るものであった。別の言い方をすれば、江戸弁を基にした口語ではなく、漢文調の日本入門レベルで手解きに相応しいものであった。漢文調は学問的な書き言葉の典型であって、1880年代半ばまでその地位を占め続けていた。

1847年には早くもオーストリア人で、独学の学者であったプフィツマイアーが、*Sechs Wandschirme in Gestalten der vergänglichen Welt* という本を出版した。それは、柳亭種彦の作『浮世形六枚屏風』のドイツ語訳、ヨーロッパでは最初の日本の小説の翻訳といわれている。1851年彼は『日本語辞典』の第一部を出版した。また一方、中国学方面に数多くの論文を物した（Pantzer 1987）。イギリスの有名な翻訳者で、これもまた独学の学者であったアーサー・ウェイリー（1889-1966）も、教授職に就くことはなかったが、中国研究と日本研究を兼ねる学者の典型であろう。彼が出版した著作は、古代中国を扱った『古代中国の三思想』『九歌』、また一方、『枕草子』、『源氏物語』日本の詩歌の名訳をも数多く世に送った。日本研究の担い手と評価されるドナルド・キーンのような人も、シリル・バーチ（Cyril Birch）の『中国文学選集』に中国の連歌の翻訳を寄稿したことがある。

固定観念であるにせよ、一般論であるにすぎないにせよ、主要な文明とこれらから派生した多くの文化、という観念もしくは概念が人口に膾炙している。その見方からすると、日本文化は中国文化から派

生した派生的文化とされる。が、この派生の具体的な実践は、多種多様である様で、かなり独断的に適用されるのも事実である。同じように考えるなら、ヨーロッパの文化はギリシャ・ローマの古典文化及びユダヤの伝統から派生したものと考えられるべきであるが、その派生性は日本文化を語る時ほど強調されない。これは、ヨーロッパ文化の場合、基本的に内部者の観点から見た自己描写であるのに対して、日本文化の場合、外部者の見地から見た表象であるという事実に依ると思われる。更にはヨーロッパ文化が他の派生的文化、例えば北アメリカ文化の基礎と考えられる。

Ⅳ．外来性 foreignness の構築

柳父氏は、日本語への翻訳の基本的技術が生成したのは、日本人が漢字と初めて接触したときであったと想像している。その接触の過程で、漢字の「音読み」と「訓読み」、読み下しとして知られる瞬間的な翻訳技術を次第に生み出していくのであった。音読みは、元々の中国語の発音を基にして、日本人の音韻に合わせて生成した音声であるが、訓読みはその漢字に対応する自国の日本語の単語の音を表している。それゆえ、どちらの読み方も、日本語の音韻が生み出したものである。氏は、音読みが中国語に似ているように思われるが、実際異なっているということがとりわけ重要であると述べる。この、似ているように思われるが実際異なっているということは、日本語に於けるすべての外来語、外国に起源を持っている全ての文化現象の特徴である。元のものと似ているように思われるが異なっている。同じ「見かけ」の類似が漢文の場合でも見られる。というのも、漢文は古典的中国語に似ているが、実際一連の日本語の統語論と形態論の規則に従って読まれるからである。このようにして、漢文は元の中国語に見かけは似ているが実際異なっている。それは中国語でもなく日本語でもなく、訳文の書き物である。音読みと訓読みは交換可能な読み方で、中国語起源の単語と対応する日本の単語の間にある隙間を取り持っている。読み下しの中に、音と訓は、日本語の統合的な諸規則に基づいて織り合わされている。起源が異なる二つの語彙を、使い分けをはっきりさせながら一つの語彙に融合構造は、日本に於ける翻訳技術の基礎を形成してきた。これは、日本人の学者、学生が、中国の古典だけでなく、オランダ語、英語、そのほかの西洋言語を学ぶときにも、日本語の歴史を通じてずっと使ってきた方法なのである。この吸収方法は外国の文化的要素を受け入れるときの基本的な型になった（Yanabu 1996, p.153）。

江戸時代に日本人がオランダ語を学習したとき、明治時代に英語と他の西洋言語に取り組んだとき、同じ技術を適用した。それぞれ元の単語を日本語の単語（音読みもしくは訓読み）に置き換え、日本語の統語法に基づいて語順を変え、形態論的要素をいくつか付け加え、日本語の文を作っていく。このようにして日本人はこの翻訳の方法を受け継いで、外国語の研究に適応したのである（Yanabu 1996, p.154）。

このようにして、翻訳は文化を摂取するためのきわめて日本的な方法になった。前近代において、日本の科学書は、それらが翻訳であるという事実から権威を得るものであった。それらがより低い要素をより高い要素に取り換える仲介をするものであったことによって威信が高かった。

V．朝貢体制

中華帝国ほど、文化が本質的に、明白に政治的な色彩を帯びた概念であるところはない。このため、いわゆる対外関係、外交関係は常に朝貢制度によって運用されるものであった。朝貢は、他国の人々が中国文明の善良たる影響（懐柔）に服従したということを意味していたからである。このように、文化と政治は同一のものになっていた。中華文明に服従するということは、中国の皇帝に対して忠誠の念を示し、天子がこの世（天下）の唯一の支配者であることを認めることであった。しかし、この世界の秩序は現に整えられつつあるる途中であり、まだ不完全なものである。なぜなら、世界にはまだ中国の支配に服従し、文化に「転向」していない人々、支配者がいる。この秩序は中国語で華夷秩序という。華夷秩序は階層的、一方的な体制である。中国以外の国が文明を生み出して居らず、当然「野蛮」であるから、中国は諸外国の文化を知る必要がない。中国人は外国に関する情報の収集は行っていたが、植民地に於ける文化人類学、民俗学の方法に似ていなくもないものであった。彼らのデータ収集は、先入観を持って研究対象に向かった、植民地時代の民族誌学者の方法に似たところがあった（Kuwayama 2004, p.28）。文明とは、中国的な意味では、他の文明が存在する余地をほとんど残さない、中央集権的な図式だった。朝貢制度が東洋地域に於ける全面的な秩序概念であったという認識が、西洋に於ける東洋学界にどの時点に認められ、定着したのであろうか。論議の余地はあるが、ややもすれば、それは最近の発想であり、ハーヴァード大学刊行会から1968年に出版された、ジョン・キング・フェアバンク編著の重要な論文集『中国の世界秩序：中国の伝統的な対外関係』がその古典的な表現といえるだろう。

いずれにせよ、朝貢制度は中国人が自己のアイデンティティを構築する方法の象徴的表象であり、その体制が先在していた為、それが、日本人が自己を知覚し、自己のアイデンティティを構築する方法に深い影響を及ぼしたのである。平安時代中期、日本は中国への使節を中断したが、この中断の決断は日本の史学者によってきわめて重要な転換期として解されてきた。日本は朝貢関係の図式を放棄したが、他の国からの朝貢も拒否した。10世紀、907年に唐王朝が崩壊後、中国中原・江南に割拠した十国のうちの一つ呉越国（907～908）が日本と朝貢関係を結ぼうとした。三回にわたって、この地方の支配者は日本の朝廷に通商使節を送った。これは日本の皇帝を宗主として扱うことになったが、驚くべきことに、いずれの機会にも、朝廷は関係の確立の要求を断った。朝廷は「臣民国間の私的な交易」を望ましくないとして、その受け容れが儀式として朝貢関係に入る行為と解釈されないように、貢物に対してそれ相当の弁済を送った（大庭・王 1995, pp.168-169）。これは中国に対する敬意を表したものであったと思う。このようにして、日本は中国への使節を送るのをやめていたが、なおも自らを中国の朝貢の図式の中に位置づけ続けた。つまり、日本は、朝貢関係が国際関係を支配し、中国によって指導された体制であることを認めながらも、朝貢関係を放棄したことになる。朝貢関係があたかも文化的アイデンティティの象徴であったかのように、それを拒絶したように思える。

18世紀に入っては日本は、摂取行為を一歩進め、中華的世界秩序から派生する文化的関係そのものを問題にし始めた。日本人は自分たちが認識していた世界の中に於ける自分たちの位置づけを問い直し、新しい世界観を想像したのである。中国に近似しようとするのではなく、日本と外国との相違を強調しようとする衝動が強くなっていった。国学者として知られる一団の知識人たちが基準となる文化として

中華文化をはずし、自国のものと主張された、代替のイデオロギーと価値観を作り出そうとした。「相違」という問題は学界の一部にとって最優先の問題となった。一部の著作ではあるが、中国は、日本から遠く離れた、全く異国の外国の地として登場し始めた。中国がもはやまじめには取り上げられず、嘲笑の対象となるような例も多く現れた。この新しい風潮の初期の一例が平賀源内（1728-1779）であった。宝暦13年（1763）に出版された『風流志道軒伝』には、中国人たちが少しも威厳を持たないものとして登場する。彼らは、中国が日本に劣らず自然美を呼び物にするために、張子の富士山を求めて日本へ出発する。しかし伊勢から吹いてくる風が張子の山を破壊し、中国人の企みを失敗させる結末になる（城福　1976, pp.92-94; Johnson 1996, pp.84-85）。他の著作でも源内は中国文化に対してあまり敬意を表していない。『物類品隲』では彼は無遠慮に、有名な中国の本草誌には不十分なところがあると指摘している（Haga 2001）。朝貢制度は本来中国によって打ち立てられた摂取の構成概念であるが、日本がまた一歩進んで中国を摂取するのであった。本居宣長は、最高傑作『古事記伝』（1764年執筆開始され結局出版されたのは1822年だった）で、最上権威の資格を『古事記』に割り当て、それを文化の源泉の資格にまで押し上げ、そこから日本の純粋な言葉と元々の真理を回復することができる、とした。宣長に至っては、中華文化を日本文化に摂取するどころか、転訛と堕落の基として排除しなければならないものとなった。

Ⅵ．曖昧な境界

中国の摂取方法は朝貢制度だとするなら、日本のそれは翻訳だった。しかし、19世紀に入れば、中国の朝貢体制を基にした世界秩序は崩壊していく。日本はそのときから活発な能動的な国際的な役割を演じ始め、完全に朝貢体制の枠組みを無視しだした。中国ももはや朝貢体制に頼れなくなり、世界における自分の位置付けを見直すことを余儀なくされた。そして中国もまた翻訳を通して大いなる摂取の事業に乗り出し、西洋文明と共に到来したあらゆる新規概念を表すために日本人が作り出した新語さえ、それらが漢字で書かれているからいくらかは中国のものであるということを主張しながら、逆輸入・摂取したのである。特に、西洋科学の多くの用語が日本語の漢語に翻訳され、遂に中国に導入されたのである。

科学の一分野を例に取ってみよう。19世紀、日本に於ける植物学は凄まじい変化を経験した。日本の植物学者は、西洋の用語に対応する新語を作り出す優れた能力を発揮した。そして中国の植物学にも大きな影響を与えた。19世紀中出版された中国語の科学書に見られる植物学の用語は、1900年前後そして20世紀最初の20年に見られる用語ときわめて異なる。20世紀初頭の中国の植物学の著作に、日本人の学者が作り出した新造の漢語が数多く見出される。フランス人のイエズス会士レオン・ウィーガーは、科学用語の仏中語彙集の序文に以下のように書いている。「約20年前は、中国語での科学用語は、到底期待出来ないものと、多くの人々は思っていた。これらの懐疑論者は、いかなる種類の用語でも作り出せる漢字の驚くべき能力に気づいていなかっただろう。また日本での最近の展開にも注意も払っていなかっただろう。ある日、この不可能といわれたものが、図らずも実現されるようになった気が付いたのだ。ヨーロッパあるいやアメリカの最良のお手本を使って、日本人は、いつものように、漢字を使って教科書を編纂した。中国人は、自分たちのものを取り戻して、これら完全な教科書を、新しい時代の学校で

使うために中国語に翻訳したのだ。後に、新しい貢献が相次ぎ、段々この基本に蓄積していった」(Taranzano 1914, p.Ⅲ. 日本語訳は執筆者による)。

これはフランス人のイエズス会士の書いたものであるが、中国文明に負ったところのある文化に対する中国人の態度を、端的に映し出している。漢字の起源は中国にあるのだから、中国は漢字に対して永遠な権利を保持していると思い込んでいる様である。だから、中国学者であるレオン・ウィーガーは「自分たちのものを取り戻して」という言い方をするのである。英語やフランス語に取り入れられた、ギリシャ語から派生した借用語をすべてギリシャ人が「取り戻す」などとは、ヨーロッパでは想像し難い。いずれにせよ、新造の漢語を日本から取り入れることは、中華帝国が自分と交流を持とうとしたあらゆる諸国に課した朝貢関係とは、ほど遠いものであり、他の文化から中華文化に貢献に足るものはないということを前提とした朝貢制度の図式に当て嵌まらない。しかし、逆に、西洋科学の概念に対応して日本人が多くの訳語を作り出したという功績を、中国文明が日本にどれだけ深く根付いた証拠として解釈することもできるだろう。

いずれにせよ、中国人の学者が19世紀中に西洋の翻訳者の協力を得て作り出した用語法は使用されなくなり、日本で新しく作られた漢語の用語法は採用されるに至った訳である。『植物学』(1858年刊行)に初出の一連の用語、たとえば、植物学という学科名(17)及び卵巣、心皮、胚珠や胎座等のような用語を除けば、中国の近代植物学の最初の三冊である『植物学』、『植物図説』、『植物須知』に見られる用語の大部分は、遂に日本で作り出された(後に中国で生み出されたものもあるが)新造の専門用語に取って代わられたのが事実である。他方、『植物学』に初めて現れた、植物科の多くの学名が、日本の学者にも採用され、今日でも使われている。植物学の「科」や「属」、更にキク(Asteraceae)、シソ(Lamiaceae)やヒャクニチソウに対する用語がそれである。

Ⅶ. 日本における中華文化

日本文化と中華文化の領分について論議するとき、必ず日本における漢文学の位置づけが浮上する。日本が生み出した膨大な漢文及びその遺産の存在によって、日本は中国に従属していると言えるのだろうか、あるいは日本文化は中華文化の領内に入ると言えるのだろうか。そして琉球文化が日本文化、中華文化、双方の影響を深く受けていたので、琉球文化の位置づけはさらに複雑になる。一方で、日本の自己認識に依れば、日本の高度文化はもとより庶民文化の一部も、中国を初め、韓国、中央アジア、インドを含む大陸の文化に負うところが多くある。何故この主張が日本人にとって重要なのかと言えば、日本人は普遍的な文化に属しているということを主張するのだからだ。日本人が自分の文化を語る時、西洋人が西洋の文化を語る時と比べては、日本人の方がその大陸に遡る起源を主張しがちなのである。西洋の高度文化の起源も古典伝統まで遡ることが出来るが、西洋人は日本人ほどその古典的起源に言及しない。それは、西洋文化には伝統というものが日本ほどウエイトを持っていないからかも知れない。伝統が日本人に比べて彼らにとって本質的ではないからだ。

他方で、文化と言うものには、起源、規範、理想から離れていく趨勢もまた存在している。漢文学に於いてさえ、日本文学、歴史的言語学といった範疇の範囲内に漢文学を組み込む傾向が常に存在してい

た。その傾向は、日本に於ける漢文学の独自性と独創性を浮き彫りにするものがある。近年、漢文学の研究の国際性を打ち立てる機運が高まってきている。漢文学の研究の国際化を推進する学者に依れば、漢文学は、かつていわゆる漢字文化圏に属していた国々にわたる、国境をまたいだ文学・学問の伝統であると主張している。この観点からすれば、日本はより広い地域の文化の一部であり、ヒエラルキー、主従関係の色彩は、完全に消え去ることはないにしても、明らかに控えめに扱われている。過去、日本と中国の関係においてそういったヒエラルキーは、華夷秩序の消えずに残った反響音のように、常に意識の深層に潜んでいた。

漢文学の研究を推進する日本人の学者は、漢文と漢学が東アジア文化に通ずるものであるとして、東アジアの学問が日本に於ける学問の源泉である、という見地に立つ。同時に日本人は、何世代にも亘って自分たちが生み出した膨大な漢文の遺産と、歴史を通じて中国で生み出されてきた中国語の遺産と区別する必要を感じている。そここそが、「漢」と「和」の区別が入る所である。この区別を最も端的に語る好例が、漢詩、つまり日本人が古典中国語の統語論に基づいて賦詠した詩である。日本人による初期の漢詩は、『懐風藻』に集められている。これらの詩は模倣的なもの、派生的なものと言われており、「和習」、あるいは「和臭」とさえ、特徴付けられている。しかし、研究が続けられ、理解が深まり、伝統が徐々に築かれていくにつれて、日本の詩人は、より熟練し、独自性に富む詩を生み出すようになった。初期の例は、平安時代後期・鎌倉時代の、九月十三夜を詠う詩に見出せると学者は指摘している。というのは、中国の詩人によって扱われていない主題である。

五山の学僧たちは、とりわけ中国の詩と詩学に造詣が深いことは周知の通りであるが、江戸時代における漢文の開花の基礎を築いたのもこれらの学僧だ。それゆえ江戸時代は漢文と漢詩の創作の絶頂期になった。江戸時代の詩人は、新しい言葉、用法、作詩上の技巧を発明する。江戸中期から後期にかけて、彼らは唐風から宋風へと移行し、その過程の中で、和風体を生み出した。安永（1772）から天保末（1844）までの間は、日本の漢詩の絶頂期であると言われている。江戸時代末期から明治時代初期への移行期において、漢詩は、江戸の風味によって再び隆盛した。しかし、明治時代の新学制の導入に伴い、洋学が漢学の地位に取って代わった。洋学は周辺での研究から、舞台の中央に出たが、漢文は次第に古臭いものと見なされるようになった。

結論

科学と技術が、益々日常生活に浸透していくにつれて、世界中、とりわけ急速に産業化が進むアジア諸国で、社会を大きく変化させている。輸送と情報伝達の発達、速さを増す資本の流動と人的交流が、これらの国々に於ける従来の「国家文化」の表象を徐々に壊していく。文化の伝統を確認し、現在に生かしたいという強い欲望は、多くの観察者の解釈に依れば、自分の普遍性を主張する社会的理論やイデオロギーの消滅のみによって引き起こされたものではなく、グローバリゼーションに起因する不安もその欲望を助長するものと見ていいだろう（Morris-Suzuki 1995, p.760）。これは広く頷かれる分析であるが、同時に、情報伝達の発達によってこそ、個人が属している文化的共同体を同定し、属していない共同体とはっきりと一線を画することが容易になっている、と私は思う。しかし、現代の社会において個々

人が手に入れることができる情報は量質ともに圧倒されるものがあるので、情報を厳密に選択しなければならないし、実際個人は、自分の環境、自分の置かれている社会的なつながりの中に於ける生活に有益な情報伝達の手段を選択している。その結果、近代技術の発達による情報と情報伝達の激増は、国家文化の存続を脅かすと同時に、個々人に、自分が属したい文化に、ますます参与出来る機会を与えている。本来これは文化の多種多様性を促進すると思われるだろうが、実際は逆の結果が起こっている。と言うのは、情報伝達が言語を基盤にしているもので、言語は、強力なフィルターの役割を果たしており、結果的に個人が使いこなしていない言語を締め出している。個人が普通二、三を除けば世界のすべての言語を使いこなしていないから、現代的な情報伝達手段は、意外と言語、言い換えれば文化の画一性を助長してしまう結果をもたらす。こうして、英語を初め、スペイン語、フランス語など幾つかの言語を除けば、現代的な情報伝達手段は両義的な、両刃の恩恵なのである。言い換えれば、幾つかの文化以外は、脅威的な存在である。それは必ず中華文化の領分と日本文化の領分にも大きな影響を及ぼすに違いない。

参考文献

Arashiro 1998

Arashiro Toshiaki 新城俊昭. *Ryūkyū / Okinawa shi* 琉球・沖縄史. Naha: Henshū Kōbō Tōyō Kikaku, 1998 [1997].

Clammer 2001

Clammer, John. *Japan and Its Others: Globalization, Difference and the Critique of Modernity*. Melbourne: Trans Pacific Press, 2001.

Duffield 1999

Duffield, John S. "Political Culture and State Behavior: Why Germany Confounds Neorealism". *International Organization* 53: 4 (1999), pp.765-803.

Goh 1997

Goh Chok Tong, Wim Stokhof, Thommy Svensson, François Godement and Shintaro Ishihara. *Cultural Rapprochement between Asia and Europe: Five Essays on the Asia-Europe Relationship*. Lecture Series 7. Leiden / Amsterdam: International Institute for Asian Studies, 1997.

Ha 2005

Ha Woobong [Ka Uhō 河宇鳳]. "15/16 seiki no Ryūkyū to Chōsen no Kōryū - Gishi mondai o chūshin to shite" 15・16世紀の琉球と朝鮮の交流—偽使問題を中心として. *East Asia and Japan - Interaction and Transformations / Higashi Ajia to Nihon: Kōryū to 'Hen'yō* 東アジアと日本—交流と変容 2 (2005), pp.69-79.

Haga 2001

Haga, Tōru. "Dodonæus and Tokugawa Culture: Hiraga Gennai and Natural History in Eighteenth-century Japan". In *Dodonæus in Japan: Translation and the Scientific Mind in the Tokugawa Period*, ed. Willy Vande Walle and Kazuhiko Kasaya, co-ed., pp.241-261. Leuven & Kyoto: Leuven University Press & International Research Center for Japanese Studies, 2001.

Hasenclever et al. 2001

Hasenclever, Andreas, Peter Mayer and Volker Rittberger. *Theories of International Regimes*. 4th edition. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.

Hegel 1812

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. "Die Lehre vom Sein". In *Wissenschaft der Logik I*, Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft 605, ed. Eva Moldenhauer and Karl Markus Michel. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1986 [1812].

Huntington 1991

Huntington, Samuel. The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century. Norman: University of Oklahoma Press, 1991.

Jepperson et al. 1996

Jepperson, Ronald L., Alexander Wendt and Peter J. Katzenstein. "Norms, Identity, and Culture in National Security". In *The Culture of National Security. Norms and Identity in World Politics*, ed. Peter J. Katzenstein, pp.33–75. New York: Columbia University Press, 1996.

Jōfuku 1976

Jōfuku Isamu 城福勇. *Hiraga Gennai no kenkyū* 平賀源内の研究. Ōsaka: Sōgensha 創元社, 1976.

Johnson 1996

Johnson, Regine. "Tōrai Sanna and the Creation of Difference". *Japan Review* 7（1996), pp.83–98.

Kang 1993

Kang Sang Jung, and Osamu Murai. "Ranhansha-suru orientarizumu". *Gendai shisō* 21：5（1993), pp.182–197.

Kuwayama 2004

Kuwayama, Takami. *Native oAnthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*. Melbourne: Trans Pacific Press, 2004.

Lee and Temin 2006

Lee Hun-Chang［Ri Kenchō 李憲昶］and Peter Temin［Pītā Temin ピーター・テミン］. "Seigenteki gōrisei toshite no chōkō taisei-ka ni okeru Chūgoku no bōeki seisaku" 制限的合理性としての朝貢体制下における中国の貿易政策. *Ajia Bunka Kōryū Kenkyū* アジア文化交流研究 1（2006), pp.229–245.

Lewis 1990

Lewis, Bernard. "The Roots of Muslim Rage". *The Atlantic Monthly* 266：3（Sept 1990), pp. 47–60.

Liú 2006

Liú Yíngshèng 劉迎勝. "Minsho Chūgoku to Chūō Ajia / Nishi Ajia chiiki to no aida ni okeru gaikō gengo no mondai" 明初中国と中央アジア･西アジア地域との間における外交言語の問題, trans. Fujino Tsukiko 藤野月子. In *Nairikuken/Kaiikiken kōryū nettowāku to isuramu: Kyūshū Daigaku 21 seiki COE puroguramu*（*Jinbunkagaku*）"*Higashi Ajia to Nihon: Kōryū to hen'yō*" 内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム：九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」, ed. Morikawa Tetsuo 森川哲雄 and Saeki Kōji 佐伯弘次, pp.19–46. Fukuoka: Kyūshū Daigaku 21 seiki COE puroguramu（Jinbunkagaku）"Higashi Ajia to Nihon: Kōryū to hen'yō" 九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」, 2006.

Métailié 1993

Métailié, Georges. "Sources for Modern Botany in China during Qing Dynasty.". *Japan Review* 4（1993), pp.241–249.

Morikawa and Saeki 2006

Morikawa Tetsuo 森川哲雄 and Saeki Kōji 佐伯弘次, eds. *Nairikuken／Kaiikiken kōryū nettowāku to isuramu: Kyūshū Daigaku 21 seiki COE puroguramu*（*Jinbunkagaku*）"*Higashi Ajia to Nihon: Kōryū to hen'yō*" 内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム：九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」. Fukuoka: Kyūshū Daigaku 21 seiki COE puroguramu（Jinbunkagaku）"Higashi Ajia to Nihon: Kōryū to hen'yō" 九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」, 2006.

Morris-Suzuki 1995

Tessa Morris-Suzuki. "The Invention and Reinvention of 'Japanese Culture'". *The Journal of Asian Studies* 54：3（August 1995), pp.759–780.

Motegi 2006

Motegi Toshio 茂木敏夫. "Chūgoku kara mita 'chōkō taisei' - rinen to jittai, soshite kindai ni okeru saiteigi" 中国からみた〈朝貢体制〉―理念と実態、そして近代における再定義. *Ajia Bunka Kōryū Kenkyū* アジア文化交流研究 1

(2006), pp.217-228.

Ōba and Ō 1995

Ōba Osamu 大庭修 and Ō Shōshū 王暁秋, eds. *Rekishi: Nit-Chū Bunka Kōryū-shi Sōsho* 歴史―日中文化交流史叢書. Tokyo: Taishūkan Shoten 大修館書店, 1995.

Ōe 1992

Ōe Kenzaburō 大江健三郎. "Nihon no chishikijin" 日本の知識人. In *Jinsei no habitto* 人生の習慣, Ōe Kenzaburō 大江健三郎, pp.75-88. Tokyo: Iwanami Shoten 岩波書店, 1992.

Oguma 2002

Oguma Eiji. *A Genealogy of 'Japanese' Self-images*, trans. David Askew. Japanese society series. Rosanna: Trans Pacific, 2002.

Okinawa-ken Bunka Shinkōkai 1999

Okinawa-ken Bunka Shinkōkai Kōbunshokan Kanribu Shiryō Henshūshitsu 沖縄県文化振興会・公文書館管理部史料編集室, ed. *Perī ga yatte kita: jūkyū seiki ni yatte kita ikokujintachi* ペリーがやってきた―19世紀にやってきた異国人たち―(Modernization: Perry and Ryukyu). Vol.4 of *Okinawa-ken shi vijuaru han* 沖縄県史ビジュアル版. Naha: Okinawa-ken Kyōiku Iinkai, 1999.

Ono 2006

Ono Aya 小野文. "Chūgokugo wa nani ni nite iru ka - Funboruto' 'Bunpō keishiki ippan no seishitsu, tokuni Chūgokugo no tokusei ni tsuite, Aberu Remyuza-shi ni yoseru shokan' no kōsatsu" 中国語は何に似ているか―フンボルト「文法形式一般の性質、特に中国語の特性について、アベル＝レミュザ氏に寄せる書簡」の考察. *Ajia Bunka Kōryū Kenkyū* アジア文化交流研究 1 (2006), pp.31-45.

Pantzer 1987

Pantzer, Peter. *August Pfizmaier 1808-1887. Katalog zur Ausstellung anlä β lich des 100. Todestages des ôsterreichischen Sinologen und Japanologen. Österreichische Nationalbibliothek 18. - 29. Mai 1987.* Wien: Literas Universitätsverlag, 1987.

Risse-Kappen 1997

Risse-Kappen, Thomas. *Bringing Transnational Relations back in: Non-state Actors, Domestic Structures and International Institutions*, ed. Thomas Risse-Kappen. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

Tanaka 1993

Tanaka, Stefan. *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*. Berkeley: University of California Press, 1993.

Taranzano 1914

Taranzano, Ch. *Vocabulaire français-chinois des sciences mathématiques, physiques et naturelles suivi d'un index anglais-français*. Sien-hsien: Imprimerie de la Mission Catholique, 1914.

Tsuda 1963

Tsuda Sōkichi津田左右吉 "Tennō-kō" 天皇考. In *Tsuda Sōkichi zenshū* 津田左右吉全集, vol.3, Tokyo: Iwanami shoten, 1963, pp.474-487.

Wallerstein 1990

Wallerstein, Immanuel. "Culture as the Ideological Battleground of the Modern World-System.". *Theory, Culture and Society* 7 (1990).

Wendt 1992

Wendt, Alexander. "Anarchy is What States Make of It: The Social Construction of Power Politics". *International Organization* 46: 2 (1992), pp.391-425.

Yanabu 1996

Yanabu, Akira. "The Tennō System as the Symbol of the Culture of Translation". *Japan Review* 7(1996), pp.147-157.